

四日間

ガールシン

二葉亭四迷訳

青空文庫

忘れもせぬ、其時味方は森の中を走るのであった。シュツシュツという弾丸たまの中を落来おちくる小枝をかなぐりかなぐり、山査子さんざしの株を縫うように進むのであったが、弾丸たまは段々烈しくなつて、森の前方むこうに何やら赤いものが隠現ちんちん見える。第一中隊のシードロフという未だ生なま若わかい兵が此方こちの戦線せんへ紛まぎれ込こんでいるから如何どうしてだろう？ と忙しい中で閃ちらと其様な事を疑つて見たものだ。スルト其奴そいつが矢庭にペタリ尻餅を搗ついて、狼狽うろたえた眼を円くして、ウツとおれの面かおを看た其口から血が滴々たらたら……いや眼に見えるようだ。眼に見えようなは其而そればかり已やでなく、其時ふつと気が付くと、森の殆ど出端ではずれの翳鬱こんもりと生茂はえしげつた山査子さんざしの中に、居おるわい、敵が。大きな食くら肥ふとた奴であつた。俺は瘦の虚弱ひよわではあるけれど、ヤツと云つて躍おどり菟かかる、バチツという音がして、何か斯う大きなもの、トサ其時は思われたがな、それがビュツと飛で来る、耳がグワンと鳴る。打たなと気が付た頃には、敵の奴めワツと云て山査子さんざしの叢立むらだちに寄懸よりかかつて了つた。匪まわれば匪まわられるものを、恐しさに度を失つて、刺々とげとげの枝の中へ片足踏込ふんこんで躁あせつて藻搔もがいているところを、ヤツと一撃ひとつうちに銃を叩落して、やたら突つきに銃劔つっさをグサと突刺すと、獣けものの吼るでもない唸うなるでもない変な声を出すのを聞捨とにして駈出す。味方はワツワツと聞とを作つて、倒こける、射うつ、と

いう真最中。俺も森を畑へ駈出して慥か二三発も撃たかと思う頃、忽ちワツという鬨の聲が一段高く聞えて、皆一斉に走出す、皆走出す中で、俺はソノ……旧の処に居る。ハテナと思ふ。それよりも更と不思議なは、忽然として万籟死して鯨波もしなければ、銃声も聞えず、音という音は皆消失せて、唯何やら前面が蒼いと思ふのは、大方空であつたのだらう。頓て其蒼いのも朦朧となつて了つた……

どうも変さな、何でも伏臥になつて居るらしいのだがな、眼に遮るものと云つては、唯掌大の地面ばかり。小草が数本に、その一本を伝わって倒に這降りる蟻に、去年の枯草のこれが筐とも見える芥一摘みほど——これが其時の眼中の小天地さ。それをば片一方の眼で視ているので、片一方のは何か堅い、木の枝に違いないがな、それに圧されて、そのまた枝に頭が上つていようと云うものだから、ひどく工合がわるい。身動を仕たくも、不思議なるかな、些とも出来んわい。其儘で暫く経つ。竈馬の啼く音、蜂の唸なりこえ声の外には何も聞えん。少焉あつて、一しきり藻掻いて、体の下になつた右手をやツと脱して、両の腕で体を支えながら起上ろうとしてみたが、何がさで鑽で揉むような痛みが膝から胸、頭へと貫くように衝上げて来て、俺はまた倒れた。また真の闇の跡先な

しさ。

ふツと眼が覚めると、薄暗い空に星影が隠々と見える。はてな、これは天幕の内ではない、何で俺は此様な処へ出て来たのかと身動をしてみると、足の痛さは骨に応えるほど！

何さまこれは負傷したのに相違ないが、それにしても重傷か擦創かと、傷所へ手を遣つてみれば、右も左もベツとりとした血。触れば益々痛むのだが、その痛さが齧歯が痛むように間断なくキリキリと腹を撈られるようで、耳鳴がする、頭が重い。両脚に負傷したことはこれで臍氣ながら分つたが、さて合点の行かぬは、何故此儘にして置いたろう？ 豈然とは思ふが、もしヒヨツと味方敗北というのではあるまいか？ と、まず遡つて当時の事を憶出してみれば、初め臍のが末明亮となつて、いや如何しても敗北でないといと収まる。何故と云えば、俺は、ソレ倒れたのだ。尤もこれは瞭とせぬ。何でも皆が駈出すのに、俺一人それが出来ず、何か前方が青く見えたのを憶えているだけではあるが、兎も角も小山の上の此畑で倒れたのだ。これを指しては、背低の大隊長殿が占領々と叫いた通り、此処を占領したのであつてみれば、これは敗北したのではない。それなら何故

俺の始末をしなかったらう？ 此処は明放しの濶とした処、見えぬことはない筈。それに此処でこうして転がっているのは俺ばかりでもあるまい。敵の射撃は彼の通り猛烈だったからな。好し一つ頭を捻向けて四下の光景を視てやろう。それには丁度先刻しがた眼を覺して例の小草を倒に這降る蟻を視た時、起揚ろうとして仰向に倒けて、伏臥にはならなかったから、勝手が好い。それで此星も、成程な。

やっとこなと起かけてみたが、何分両脚の痛手だから、なかなか起られぬ。到底も無益だとグタリとなること二三度あつて、さて辛うじて半身起上つたが、や、その痛いこと、覺えず涙ぐんだくらい。

と視ると頭の上は薄暗い空の一角。大きな星一ツに小さいのが三ツ四ツきらきらとして、周囲には何か黒いものが轟々と立っている。これは即ち山査子の灌木。俺は灌木の中に居るのだ。さてこそ置去り……

と思うと、慄然として、頭髪が弥堅つたよ。しかし待てよ、畑で射られたのにしては、この灌木の中に居るのが怪しい。してみればこれは傷の痛さに夢中で此処へ這込だに違いないが、それにしても其時は此処まで這込み得て、今は身動もならぬが不思議、或は射られた時は一カ所の負傷であつたが、此処へ這込でから復た一発喰つたのかな。

蒼味あのみを帯びた薄明うすあかりが幾個いくつともなく汚点しみのように地じを這はつて、大きな星は薄くなる、小さいのは全く消えて了う。ほ、月の出汐でしおだ。これが家うちであつたら、さぞなア、好かろうになアと……

妙な声こゑがする。宛あだかも人の唸うなるような……いや唸うなるのだ。誰か同じく脚あしに傷てを負もつて、若もしくは腹たまに弾丸たまを有もつて、置去おきざりの憂目うきめを見ている奴やつが其処そこらに居おるのではあるまいか。唸うなりこゑは顕然まざまざと近くにするが近処あたりに人が居ゐそうにもない。はッ、これはしたり、何の事ことだ、おれおれ、この俺うなが唸うなるのだ。微かな情なさけない声こゑが出おるわい。そんなに痛いのかしら。痛いには違いあるまいが、頭かぶがただもう茫ぼうと無感むかん覚かくになつてゐるから、それで分らぬのだらう。また横臥ねころんで夢になつて了え。眠ねること眠ねること……が、もし万ひよつと一ひと此儘このままになつたら……えい、関かまうもんかい！

臥ねようとすると、蒼白い月光うすすものが隈すまなく羅ろを敷ふきように仮ふしどの寝所ふしどを照てして、五歩ごふばかり先に何やら黒い大きなものが見える。月の光を浴あびて身辺ところどころ々さん燦さんたる照返てりかえしを見みるのは釦紐ぼたんか武具ぶぐの光るのであらう。はてな、此奴死骸こいつかな。それとも負傷者ておいかな？

何方どっちでも関かまわん。おれは臥ねる……
いやいや如何どう考かんえてみても其様そのような筈はずがない。味方みかたは何処どこへ往いつたのでもない。此処ここに居

るに相違ない、敵を逐^{おいはら}払^{はら}つて此処を守っているに相違ない。それにしては話声もせず^{かがり}簞^だの爆^{はぜ}る音も聞えぬのは何故であろう？ いや、矢張^{やっぱ}己^{おれ}が弱^よっているから何も聞えぬので、其実味方は此処に居るに相違ない。

「助けてくれ助けてくれ！」

と破^やれた人間^{にんげん}離^{はな}れのした嗟^{しやがれ}声^{こゑ}が咽喉^{のど}を衝^ついて迸^{ほとばし}り出^でたが、応^おずる者なし。大きな声が夜の空を劈^{つんざ}いて四方へ響渡^{ひび}つたのみで、四下^{あたり}はまた闇^{ひっそ}となつて了^{しま}つた。ただ相変^{あひ}らず蟋^{きりぎりす}蟀^{すずめ}が鳴^なきつて真^ま円^{まる}な月が悲^{かな}しげに人を照^てすのみ。

若^もし其処^{そこ}のが負傷^{てお}者^{もの}なら、この叫^{わめき}声^{こゑ}を聴^きいてよもや氣^きの付^つかぬ事はあるまい。してみれば、これは死骸^{しかい}だ。味方^{みかた}のかしら、敵^{てき}のかしら。ええ、馬鹿^{ばか}くさい！ そんな事は如^ど何でも好^{この}いではないか？ と、また腫^{はれまぶた}眼^{まぶた}を夢^{ゆめ}に閉^ふじられて了^{しま}つた。

先^さ刻^つから覺^さめてはいるけれど、尚^{なほ}お眼^めを瞑^{ねむ}つたままで臥^ねているのは、閉^ふじた眼^{まぶた}越^こに^しも日^ひ光^めが見透^みされて、開^あけば必^{かならず}ず眼^めを射^いられるを厭^{いと}うからであるが、しかし考^{かん}えてみれば、斯^{かく}う寂^じ然^つとしていた方が勝^{まし}であらう。昨日^{きのう}……たしか昨日^{きのう}と思うが、傷^てを負^おつてから最^もう一^{いち}昼^{じつ}夜^や、こうして二^に昼^{じつ}夜^や三^{さん}昼^{じつ}夜^やと経^たつ内^{うち}には死^しぬ。何^{なん}の業^{わざ}くれ、死^しは一^{いち}ツだ。寧^{いっ}ろ寂^{じつ}然^つと

していた方が好い。身動みうごぎがならぬなら、せんでも好い。序ついでに頭の機能はたらきも止めて欲しいが、こればかりは如何どうする事も出来ず、千々に思おもい乱れ種々さまざまに思おもい侘わびて頭に些いささかの隙すきも無いけれど、よしこれとても些ちつとの間の辛抱ま。頓やがて浮世ひまの隙すきが明あいて、筐かたみに遺る新聞の数すげに行うに、我軍死傷う少なく、負傷者何名、志願兵イワーノフ戦死。いや、名前も出でまいて。ただ一名戦死とばかりか。兵一名！嗟あ矣あ彼の犬あのようなものだ。

在りし昔ありありが顕然あと目前あに浮ぶ。これはズツと昔の事、尤もな、昔の事と思おもわれるのは是ばかりでない、おれが一生の事、足を撃うちて此処こに倒れる迄の事は何も彼もズツと昔の事のように思おもわれるのだが……或日町ちみじろを通ると、人ばかりがある。思おもわずも足を駐とどめて視ると、何か哀かなれな悲鳴うずを揚あげている血塗ちみじろの白い物を皆佇たちどまつ立たてまじりまじり視みている光景うす。何かと思おもえば、それは可愛かわいらしい小犬で、鉄道馬車に敷かれて、今の俺の身で死にかつてゐるのだ。すると、何処どこからか番人ばんにんが出て来て、見物けんぶつを押分け、犬の衿えりがみ上うへをむずと掴つかんで何処どこへか持もつて去いく、そこで見物けんぶつもちりぢり。

誰かおれを持もつて去いつて呉くれる者ものがあろうか？ いや、此儘このままで死ねという事であらう。が、しかし考かんえてみれば、人生は面白いもの、あの犬の不幸あに遭あつた日は俺には即ち幸福な日で、歩あるくも何か酔心よしん地ち、また然しかうあるべき理わけ由ゆがあつた。ええ、憶おもえば辛い。憶おもうま

い憶うまい。むかしの幸福。今の苦痛……苦痛は兎角免れ得ぬにしろ、懐旧の念には責められたくない。昔を憶^{おも}い出せば自然と今の我身に引比べられて遣^{やる}瀬^せ無いのは創傷^{きず}よりも余^よッぽど程いかぬ！

さて大分熱くなつて来たぞ。日が照付け^あけるぞ。と、眼を開けば、例の山査子^{さんざし}に例の空、ただ白昼というだけの違い。おお、隣の人。ほい、敵の死骸だ！ 何という大男！ 待てよ、見覚があるぞ。矢張^{やっぱ}彼の男だ……

現在俺の手に掛けた男が眼の前に踏反^{ふんぞ}つているのだ。何の恨が有つておれは此男を手に掛けたろう？

ただもう血塗^{ちみじろ}になつてシャチコばっているのであるが、此様な男を戦場へ引張り出すとは、運命の神も聞えぬ。一体何者だろう？ 俺のように年寄^{としと}つた母親^{あは}が有うも知^しれぬが、さぞ夕暮^{はにゆう}ごにいふせき埴^{こや}生の小舎^{たらず}の戸口にイみ、遥^{はるか}の空を眺^{ながめ}ては、命の綱^{かせぎ}の人^{にん}は戻らぬか、愛^{いと}し我子の姿は見えぬかと、永く永く待わたる事であろう。

さておれの身は如何^{どう}なる事ぞ？ おれも亦^{また}まッこの通り……ああ此男^{うらや}が羨^{うらや}ましい！ 幸^あ福者^{やかりもの}だよ、何も聞^{きか}ずに、傷の痛みも感ぜずに、昔を偲ぶでもなければ、命惜しとも思^{おも}うまい。銃劔^{まッた}が心臓^{なな}の真中心^まを貫いたのだからな。それぞれ軍服のこの大きな孔^{あな}、孔^{あな}の周^ま

囲わりのこの血。これは誰たれの業わざ？ 皆みなこういうおれの仕業しわざだ。

ああ此こ様な筈はずではなかつたものを。戦争に出でたは別段悪意があつたではないものを。出でれば成程人殺もしようけれど、如何どうしてかそれは忘れていた。ただ飛来とびくる弾丸たまに向い工合ぐあい、それのみを氣にして、さて乗出のりだして弥弾丸いよいよたまの的となつたのだ。

それから此始末。ええええ馬鹿め！ 己おれは馬鹿だつたが、此不幸なる埃エジプト及の百姓

(埃エジプト及軍の服を着けておつたが)、この百姓になると、これはまた一段と罪が無なからう。鮎すしでも漬つけたように船に詰こ込られて 君士但丁堡コンスタンチノープルへ送付おられるまでは、露西亜ロシアの事もバル

ガリヤの事も唯噂うわさにも聞いたことなく、唯行けと云われたから來たのだ。若もしも厭いやの何のと云おうものなら、答しもとの憂目うれめを見るは愚かなこと、いづれかのパシャのピストルの弾を喰く

おうも知れぬところだ。スタンブルから此ルシチュクまで長い辛い行軍をして來て、我軍の攻撃に遭あつて防戦したのであるが、味方は名に負う猪武者いのしむしや、英吉利仕込イギリスしこみのパテント付づきのピーボヂーにもマルチニーにも怯びくともせず、前へ前へと進むから、始おて怖氣おじけ付づいて遁にげようとするところを、誰家どこのか小男、平生つねなら持合せの黒い拳固げんこ一撃ひとうちでツイ埒うちが明きそんな小男が飛とび來て、銃劒かぎ翳かして胸板むねへグサと。

何の罪も咎とがも無いではないか？

おれも亦同じ事。殺しはしたけれど、何の罪がある？ 何の報いで咽喉のどの焦こげ付ききそうなのこの渴かわき？ 渴かわく！ 渴かわくとは如何どんなものか、御存じですか？ ルーマニヤを通る時は、百何十度という恐ろしい熱天に毎日十里宛ずつ行軍したツけが、其時でさえ斯うはなかつた。ああ誰たれぞ来て呉れば好いいな。

しめた！ この男のこの大きな吸筒すいづつ、これには屹度きつと水がある！ けれど、取りに行かなきやならぬ。さぞ痛む事こッたろうな。えい、如何どうするもんかい、やツつけろ！

と、這出はいだす。脚あしを引摺ひきずりながら力の脱けた手で動かぬ体を動かして行く。死骸はわずか

一間と隔てぬ所に在るのだけれど、その一間が時に取つては十里よりも……遠いのではないが、難儀だ。けれども、如何仕様どうしようも無い、這はつて行く外はない。咽喉のどは熱して焦こげるよう。寧いっそ水を飲まぬ方が手短に片付くとは思いいながら、それでも若もしやに羈ひかされて……

這はつて行く。脚あしが地に泥なすんで、一と動する毎に痛さは耐こらえきれないほど。うんうんという唸うめきこえ声、それが頓やがて泣声になるけれど、それにも屈めげずに這はつて行く。やツと這付はいく。それから吸筒すいづつ——果して水が有る——而も沢山！ 吸筒すいづつ半分も有つたらうよ。やれ嬉しや、

是でまず当分は水に困らぬ——死ぬ迄は困らぬのだ。やれやれ！

兎も角も、お蔭さまで助かりますと、片肘かたひじに身を持たせて吸筒すいづつの紐を解ときにかかつた

が、ふツと中心を失つて今は恩人の死骸の胸へ伏倒りかかった。如何にも死人臭い匂がもう芬と鼻に来る。

飲んだわ飲んだわ！ 水は生温かつたけれど、腐敗しては居なかつたし、それに沢山に有る。まだ二三日は命が繋がれようというもの、それぞれ生理心得草に、水さえあらば食物なくとも人は能く一週間以上活くべしとあつた。又餓死をした人の話が出ていたが、その人は水を飲でいたばかりに永く死切れなかつたという。

それが如何した？ 此上五六日生延びてそれが何になる？ 味方は居ず、敵は遁げた、近くに往来はなしとすれば、これは如何でも死ぬに極つてゐる。三日で済む苦しみを一週間に引延すだけの事なら、寧ろ早く片付けた方が勝ではあるまいか？ 隣の側の銃もある、而も英吉利製の兎物と見える。一寸手を延すだけの世話で、直ぐ埒が明く。皆打ち切らなかつたと見えて、弾丸も其処に沢山転がっている。

さア、死ぬか——待つてみるか？ 何を？ 助かるのを？ 死ぬのを？ 敵が来て傷を負つたおれの足の皮剥に懸るを待つてみるのか？ それよりも寧ろ我手で——思に：

でないことさ、そう氣を落したものでないことさ。活られるだけ活てみようじゃないか。

何のこれが見付かりさえすれば助かるのだ。事に寄ると、骨は避^よけているかも知れんから、そうすれば必ず治る。国へ歸つて母にも逢える、マ、マ、マリヤにも逢える……

ああ国へはこうと知らせたくないな。一^{ひとおもい}思^{ひよつと}に死だと思わせて置きたいな。そうでもない偶然^{ひよつと}おれが三日も四日も藻掻^{もが}ていたと知れたら……

眼^まが眩^{くら}う。隣歩きで全^{すつかり}然^{ぜん}力が脱けた。それにこの恐^{おっそ}ろしい臭気は！ 随分と土気色になつたなア！ ……これで明日^{あすあさつて}明後日^{あすあさつて}となつたら——ええ思遣られる。今だつて些^{ちつ}ともこゝうしていたくはないけれど、こう草^{くたびれ}臥^ふては退^のくにも退^のかれぬ。少し休息したらまた旧^{もと}処^{ところ}へ戻ろう。幸いと風^{うしろ}を後^{うしろ}にしているから、臭気は前方^{むこう}へ持つて行こうというもの。

全^{すつかり}然^{ぜん}力が脱けて了つた。太陽は手や顔へ照付ける。何か被^{かぶ}りたくも被^{かぶ}る物はなし。責^{せめ}て早く夜になとなれ。こうだによつてと、これで二晩目かな。などと思う事が次第^{もつ}に糾^{もつ}れて、それなりけりに夢さ。

大分永く眠つていたと見えて、眼を覺してみればもう夜。さて何も變つた事なし、傷は痛む、隣のは例の大柄の五体を横たえて相變らず寂^{じゃく}としたもの。

どうも此男の事が気になる。遮^{さもあれ}莫^もおれにしたところで、憐^{いと}しいもの可^{かわ}愛^あもの^いを残らず

振棄てて、山超え川越えて三百里を此様なバルガリヤ三界へ来て、餓えて、凍えて、暑さに苦しんで——これが何と夢ではあるまいか？ この薄福者の命を断つたそればかりで、こうも苦しむことか？ この人殺の外に、何ぞおれは戦争の利益になった事があるか？

人殺し、人殺の大罪人……それは何奴？ ああ情ない、此おれだ！

そうそう、おれが従軍しようと思立つた時、母もマリヤも止めはしなかったが、泣いたつけ。何がさて空想で眩んでいた此方の眼にその泪が這入るものか、おれの心一ツで親女房に憂目を見するという事に其時はツイ気が付かなんだが、今となつて漸う漸う眼が覺めた。

ええ、今更お復習しても始まらぬか。昔を今に成す由もないからな。

しかし彼時親類共の態度が余程妙だった。「何だ、馬鹿奴！ お先真暗で夢中に騒ぐ！」と、こうだ。何処を押せば其様な音が出る？ ヤレ愛国だの、ソレ国難に殉ずるのという口の下から、如何して彼様な毒口が云えた？ あいらの眼で観ても、おれは即ち愛国家ではないか、国難に殉ずるのではないか？ ではあるけれど、それはそうなれど、おれはソノ馬鹿だという。

で、まず、キシニョーフへ出て来て背囊はいのうやら何やらを背負せおされて、数千の戦友ともと共に出征したが、その中でおれのように志願で行くものは四五人とあるかなし、大抵は皆成るう事なら家に寝ていたい連中れんじゆうであるけれど、それでも善くしたもので、所謂決死連いわゆるの己達おれたちと同じように従軍して、山を超え川を踰え、いざ戦鬪となつても負けずに能く戦う——いや更と手際てぎわが好いかも知れぬてな。尤も許しさえしたら、何も角も抛かて置いてさ々と帰るかも知れぬが、兎も角も職分だけは能く尽す。

颯さつと朝風が吹通ると、山査子さんざしがざわ立つて、寢惚ねぼけた鳥が一羽飛出した。もう星も見えぬ。今迄薄暗かつた空はほのぼのと白みかかつて、い羽毛やわらかを散らしたような雲が一杯に棚引き、灰色の暗霧もやは空へ空へと晴て行く。これでおれのソノ……何と云つたものかしら、生にもあらず、死にもあらず、謂わば死苦しくの三日目か。

三日目……まだ幾日いくか苦しむ事であろう？　もう永くはあるまい。大層弱つたからな。此塩梅あんばいでは死骸そばの側を離れたくも、もう離れられんも知れぬ。やがておれも是になつて、肩なうを比べて臥ねていようが、お互に胸悪くも思はなくなるのであるう。

兎に角水は十分に飲むべし。一日に三度飲もう、朝と昼と晩とな。

日の出だ！ 大きく盆のようなのが、黒々と見ゆる山査子さんざしの枝に縦横たてよこに断截たちきられて血潮くれないのように紅に、今日も大方熱い事であろう。それにつけても、隣の——貴様はまア何となる事ぞ？ 今でさえ見るも浅ましいその姿。

ほんに浅ましい姿。髪の毛は段々と脱落ぬけおち、地体じたいが黒い膚はだの色は蒼褪あわぎめて黄味わうみさえ帯び、顔の腫脹むくみに皮が釣れて耳うしろの後で罅裂えみわれ、そこに蛆うじが蠢うごめき、脚あしは水腫みずはれに脹上はれあがり、脚絆あわせめの合目あわせめからぶよぶよの肉が大きく食出はみだし、全身むくみ上つて宛然さながら小牛こぎうのよう。今日一日太陽さうに晒さらされたら、これがまア如何どうなる事ぞ？ こう寄添よそつていては耐たまらぬ。骨しやうりが舍利しやうりに成ろうが、これは何でも離れねばならぬ——が、出来るかしら？ 成程手も挙げられる、吸筒すいづつも開けられる、水も飲めることは飲めもするが、この重い動かぬ体を動かすことは？ いや出来ようが出来まいが、何でも角かでも動かねばならぬ、仮令たとえ少しずつでも、一時間によし半歩ずつでも。

で、弥移いよいよ居まっしを始めてこれに一朝全潰ひとあきまるつぶれ。傷も痛いたんだが、何のそれしきの事に屈めげるものか。もう健康な時の心持は忘わすれようで、全く憶おもい出いだせず、何となく痛に慣なんだ形だ。一聞きこばかりの所を一朝かかつて居去いざつて、旧もとの処ところへ辛かろうじて辿たどり着つきは着いたが、さて新鮮の空気を呼吸し得たは束の間、尤も形の徐々そろそろ壊くずれ出した死骸しかいを六歩と離れぬ所で新鮮の

空氣の沙汰も可笑しいかも知れぬが——束の間で、風が變つて今度は正面に此方へ吹付ける、その臭さに胸がむかつく。空の胃袋は痙攣を起したように引締つて、臟腑が顛倒するような苦しみ。臭い腐敗した空氣が意地悪くむんむツと煽付ける。

精も根も尽果てて、おれは到頭泣出した。

全く敗亡て、ホウとなつて、殆ど人心地なく臥て居た。ふツと……いや心の迷の空耳かしら？ どうもおれには……おお、矢張人声だ。蹄の音に話声。危なく声を立てようとして、待てしばし、万一敵だつたら、其の時は如何する？ この苦しみに輪を掛けた新聞で読んでさえ頭の髪の毛の弥堅そうな目に遭おうも知ぬ。随分生皮も剥れよう、傷を負うた脚を火炙にもされよう……それしきは未な事、こういう事にかけては頗る思付の好い渠奴等の事、如何な事をするか知たものでない。渠奴等の手に掛けて弄殺しにされようより、此処でこうして死だ方が寧ろ勝か。とはいふものの、もしひよツと是が味方であつたら？ えい山査子奴がいけ邪魔な！ 何だと云つてこう隙間なく垣のように生えくさつた？ 是に遮られて何も見えぬ。でも嬉やたつた一カ所窓のように枝が透いて遠く低地を見下される所がある。あの低地には慥か小川があつて戦争前に其水を飲だ筈。そう云えば

ソレ彼処に橋代に架した大きな砂岩石の板石も見える。多分是を渡るであろう。もう話声も聞えぬ。何国の語で話していたか、薩張聴分られなかったが、耳さえ今は遠くなつたか。己れやれ是が味方であつたら……此処から喚けば、彼処からでもよもや聴付けぬ事はあるまい。愁いに早まって虎狼のような日傭兵の手に掛ろうより、其方が好い。もう好加減に通りそうなもの、何を愚頭々々しているのかと、一刻千秋の思い。死骸の臭気は些も薄らいだではないけれど、それすら忘れていた位。

不意に橋の上に味方の騎兵が顕れた。藍色の軍服や、赤い筋や、鎗の穂先が煌々と、一隊挙つて五十騎ばかり。隊前には黒髯を怒らした一士官が逸物に跨つて進み行く。残らず橋を渡るや否や、士官は馬上ながら急に後を捻向いて、大声に

「駄足イ！」

「おおい、待つて呉れえ待つて呉れえ！ お願いだ。助けて呉れえ！」
競立った馬の蹄の音、サーベルの響、がやがやという話声に、嗟声は消圧されて——やれやれ聞えぬと見える。

ええ情ないと、気も張も一時に脱けて、パツタリ地上へひれ伏しておいおい泣出した。吸筒が倒れる、中から水——といえは其時の命、命の綱、いやさ死期を緩べて呉れてい

ようというソノ靈藥が滾々ごぼごぼと流出る。それに心附いた時は、もうコップ半分も残つてはいぬ時で、大抵はからからに乾燥はしやいで咽喉のどを鳴らしていた地面に吸込まれて了つていた。

この情ない目を見てからのおれの失望落胆と云つたらお話にならぬ。眼を半眼はんがんに閉じて死んだようになっておつた。風は始終向むきが變つて、或は清新な空氣を吹付けることもあれば、又或は例の臭氣に嗔咽むせさせることもある。此日隣のは弥々いよいよ浅ましい姿になつて其慘状は筆にも紙にも尽されぬ。一度光景ようすを窺うかがおうとして、ヒョツと眼を開あいて視て、慄然ぞつとした。もう顔の痕迹あともない。骨を離れて流れて了つたのだ。無氣味ぶきびにゲタと笑いかけ、其儘固まつて了つたらしい頬ほ桁げたの、その厭らしさ浅ましき。随分髑髏されこうべ體たいを扱つて人頭の標本を製した覺もあるおれではあるが、ついぞ此様こんなのに出逢つたことがない。この骸骨が軍服を着けて、紐釦ぼたんばかりを光らせている所を見たら、覚えず胸震が出て心中で嘆息を漏した、「嗚呼戦争とは——これだ、これが即ち其姿だ」と。

相変らずの油照あぶらでり、手も顔も既もうひりひりする。残少なの水も一滴残さず飲干して了つた。渴かわいて渴かわいて耐えられぬので、一滴ひとしずく嘗める積つもりで、おもわずガブリと皆飲んだのだ。嗚呼ああ彼の騎兵がツイ側そばを通る時、何故なぜおれは声を立てて呼ばなかつたらう？ よし彼あれが敵であつたにしろ、まだ其方が勝ましであつたものを。なんの高が一二時間責せめさいなまれる

までの事だ。それをこうして居れば未だ幾日ごろごろして苦しむことか知れぬ。それにつけても憶出すは母の事。こうと知つたら、定めし白髪を引撈つて、頭を壁へ打付けて、おれを産んだ日を悪日と咒つて、人の子を苦しめに、戦争なんぞを発明した此世界をさぞ罵る事たろうなア！

だが、母もマリヤもおれがこう踬死に死ぬことを風の便にも知ろうようがない。ああ、母上にも既う逢えぬ、いいなずけのマリヤにも既う逢えぬ。おれの恋ももう是限か。ええ情けない！ と思うと胸が一杯になつて……

えい、また白犬めが。番人も酷いぞ、頭を壁へ叩付けて置いて、掃溜へポンと抛込んだ。まだ息氣が通つていたから、それから一日苦しんでいたけれど、彼犬に視ればおれの方が余程惨憺だ。おれは全三日苦しみ通したものを。明日は四日目、それから五日目、六日目……死神は何処に居る？ 来てくれ！ 早く引取つてくれ！

なれど死神は来てくれず、引取つてもくれぬ。此凄まじい日に照付られて、一滴水も飲まなければ、咽喉の炎えるを欺す手段なく剩さえ死人の臭が腐付いて此方の体も壊出しそう。その臭の主も全くもう溶けて了つて、ポタリポタリと落来る無数の蛆は其処あたりやうようよぞろぞろ。是に食尽されて其主が全く骨と服ばかりに成れば、其次は此

方ツチの番。おれも同じく此姿になるのだ。

その日は暮れる、夜が明ける、何も変った事がなくて、朝になっても同じ事。また一日を空あだに過す……

山査子さんざしの枝が揺れて、ざわざわと葉摺はすれの音、それが宛然さながらひそめきたって物を云つていよう。「そら死ぬそら死ぬそら死ぬ」と耳の端はたで囁ささやけば、片々かたかたの耳元でも懐しい面かお

「もう見えぬもう見えぬもう見えぬ」

「見えん筈ごとじゃ、此様このな処ところに居おるじやもの、」

と声高こえだかに云う声が何処か其処らで……

ぶるぶるとしてハツと気が付くと、隊の伍長のヤーコウレフが黒眼勝やきの柔しい眼で山査子さんざしの間から熟じつと此方こちらを覗のぞいている光景ようす。

「鋤すきを持ち来い！ まだ他ほかに二人おる。こやつも敵ぞ！」という。

「鋤すきは要らん、埋うめちやいかん、活いきて居るよ！」

と云おうとしたが、ただ便たよりない呻うめき声こゑが乾付からびついた唇を漏れたばかり。

「やッ！ こりや活いきとるンか？ イワーノフじゃ！ 来い来い、早う来い、イワーノフが活きとる。軍医殿を軍医殿を！」

瞬く間に水、焼酎、まだ何やらが口^{こうちゆう}中へ注^{そそぎ}入れられたようであつたが、それぎりでまた空^{くう}。

担架は調子好く揺れて行く。それがまた寝^ねせ付^{つけ}られるようで快い。今眼が覚めたかと思ふと、また生^{しょうたい}体を失う。繃帯をしてから傷^{いたみ}の痛も止んで、何とも云えぬ愉^{こころよき}快に節々も緩^{ゆる}むよう。

「止まれ、卸^{おろ}せ！ 看護手交代！ 用意！ 担^{にな}え！」

号令を掛けたのは我衛生隊附のピョートル、イワーヌイチという看護長。頗^のる背^{のっぼう}高で、大の男四人の肩に担^{かつ}がれて行くのであるが、其方へ眼を向けてみると、まず肩が見えて、次に長い疎^{まばら}髻^{ひげ}、それから漸く頭が見えるのだ。

「看護長殿！」

と小声に云うと、

「何^なか？」

と少し屈^こ懸^みるようにする。

「軍医殿は何と云われました？ 到底助かりますまい？」

「何を云う？ そげな事あッて好^よもんか！ 骨に故障が有るちゆうじやなし、請合うて助

かる。貴様は仕合しあわせぞ、命を拾うたちゆうもんじやぞ！ 骨にも動脈にも触れちよらん。如何どうして此三昼夜ばツか活いきちよったか？ 何を食うちよったか？」

「何も食いません。」

「水は飲まんじやったか？」

「敵の吸筒すいづつを……看護長殿、今は談話はなしが出来ません。もう少し後で……」

「そうじやろうそうじやろう寝ろ寝ろ。」

また夢に入いつて生しょう体たいなし。

眼が覚めてみると、此処は師団の仮病舎。枕頭まくらもとには軍医や看護婦が居て、其外べ彼テル

得堡ブルグで有名な某国手ぼうこくしゅがおれの傷てを負った足の上に屈こ懸みかつてゐるソノ馴染なじみの顔も見

える。国手は手を血塗ちみじろにして脚あしの処で暫く何かやっていたが、頓やがて此方こちらを向いて、

「君は命いのち拾ひろをしたぞ！ もう大丈夫。脚あしを一本お貰い申したがね、何の、君、此様こんな

脚あしの一本位ぐらい、何でもないさねえ。君もう口が利きけるかい？」

もう利きける。そこで一伍一仕いちぶしじゅうの話をした。

青空文庫情報

底本：「平凡 私懷疑派だ」講談社文芸文庫、講談社

1997（平成9）年12月10日第1刷発行

底本の親本：「二葉亭四迷全集」筑摩書房

1984（昭和59）年11月～1991（平成3）年11月

入力：長住由生

校正：：はやしだかずこ

2000年11月8日公開

2005年12月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

四日間 ガールシン

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 二葉亭四迷訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>